



從容録に学ぶ (六六)

第二九則 風穴鉄牛

〔示衆〕
衆に示して云く、遅基の鈍行は、斧柯を爛却せん。眼を転じ頭迷えば、杓柄を奪将らん。若也し鬼窟裏に打在らば死蛇頭を把定す。還た変豹の分あらん也無。

〔本則〕
挙ぐ、風穴、郢州の衙内に在つて、上堂して云く、「祖師の心印、状は鉄牛の機に似たり。」(針劄を入れず。)
「去れば即ち印住む。」(鼻孔を袂廻す。)
「住らば即ち印破す。」(脚眼を截断せよ。)
「只だ去らず住せざるが如きは、印すが是か印せざるが是か？」(泥裏で土塊を洗う。)
時に盧陂長老あり。出でて問うて云く、「某甲に鉄牛の機あり、請う師、印を塔げざれ。」



『從容録』
全百巻の中で、最も難解とされるのがこの則。たしかに語句・内容・構成ともに、一筋

(宛も逆水の波あり。)
穴云く、「鯨鯢の巨浸に澄むを釣るに慣れて、却つて嗟く、蛙歩が泥沙を輾ることを。」
(引魂幡子、搗氣袋。)
陂、佇思る。(已に鬼門の関を過ぐ。)
穴、喝つて云く、「長老、何ぞ進語せざる?」
(すでに崖岸に臨んで更に一推を与う。)
陂、擬議す。(許多の時節、甚処にか去来す。)
穴、打つこと一扠子して云く、「還た話頭を記得せりや? 試みに挙げて看よ。」
(人の為なればその為に徹し、人を殺すには血を見るまで。)
陂、口を開かんと擬す。(猶自ら焼埋に伏せず。)
穴、又打つこと一扠子す。(仍お三十棒を少く。)
牧主云く、「仏法と王法と一般なり。(官と做ることを会せざれば、傍州の例を見る。)
穴云く、「箇の什麼を見るや?」
(却つて好し、一扠子を与うるに。)
牧云く、「当に転ずべきに転ぜざれば、返つて其の乱を招く。」
(自ら罵り自ら招く。)
穴、便ち下坐す。(意を得ること、濃やかなる時、正に好し休むるに。)

縄ではありません。いま、どうしてこんな則をとり上げるかといえば、今夏の異常なまでの暑さとコロナ禍。そうです。暑氣払いと厄除けのつもりで、難則に体当りしましょう。なお、この則は『碧巖録』第三八則にも採られていますが、なお難しいようです。

風穴とは風穴延沼（八九六〜九七三）で、臨濟―興化―南院―風化と法を承ける、臨濟下第四世の人。時代は唐末です。風穴は浙江省杭州の人。今は数百万の大都市ですね。儒学を学んだのちに出家し、鏡清に学んでから湖北省華嚴院の南院慧顛に師侍して得法のち汝州（河南省）風穴山に道場を開いて活躍した英傑。

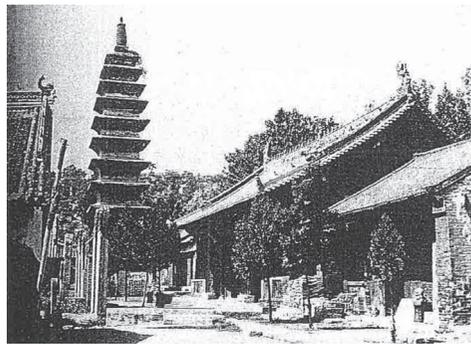
まず万松さんの「示衆」です。

「下手な碁打ちがのんびんだらりだと、斧の柄がくさってしまう。そんな下手にかぎって活きる石を殺し、死石ばかりいじり回して一局を失う。一石を打ち込んで、全局を挽回できる者はいないかな？」

ほほ、こんな意味。風穴の機縁に対する痛烈な批評なのです。勝負ごとに限らず、政治・経済・芸道・学問・競技など、さまざまな行為や分野で、似たような場面がありますね。「頂門の一針」が必要とされることが。次に

長い長い「本則」です。

風穴が郢州の城内にいた時、知事さんの招きで説法をした。はじめに「祖師の得ている仏心印の形は、鉄牛のはたらきに似ている。」と。つまり、仏法や仏法は確乎不動だという訓示。また、「ただ不動の中に自在のはたらきがある」と。すると居合わ



風穴寺に現存する唐代七祖塔

せた盧陂長老が「私にはそのはたらきがありません」と。そこで風穴「大鯨を釣ろうとしたら青蛙が引っかかった」。長老が何も云えないのを見て風穴は大声で、「何か云わんか?」。こうして云おうとすると打たれることが二回つづいた。そこで見かねた

知事は「仏法と王法は一般だ。」「なぜですか?」「きめどころをピタリときめておかないと、後に禍いを起しますから。」これで風穴は引き下がった。

ほほ、こんなやりとりです。こんな問答のやりとりの一々に対して、じつは万松さんの詳細なコメントがついているのです。そのあらましを書いていたら、この一〇倍もの紙幅がないと紹介できませんので、ここでは省略。

この本則の眼目は、禅祖たちの悟りのころが自在の鉄牛のようなはたらきでなければならぬという教訓にあります。もともと鉄牛とは、伝説上の禹王が黄河の氾濫を防ぐために鑄させて祀ったという大鉄牛のことで、その牛頭は河南に、牛尾は河北にあると伝えられるシロモノ。ちよつとスケールがちがいますね。

なお、『従容録』には風穴が主人公となっている「風穴一塵」という一則が第三四則に収められています。これまたスケールの大きなはたらきを示したものです。風穴の力量を示すに充分ですが、私たちがマネをすると、それこそ野狐禅に落ちてしまうので、けっして人を煙に巻くような言説が禅であると思っはなりません。

山内 勤静

御老師、住職を退任

一二月を予定、後任は明石師

御老師が住職の交代を決意されました。予定は一二月ごろ。後任には明石師が就任されることになりました。この情報は檀家さん向けの機関誌『龍泉院だより』に掲載されました。全文は以下の通りです。

コロナ禍ですべての行事の予定など立てにくくなっていますが、既報の住職交代については、現時点の予定は左記の通りです。現住職は一二月ごろ住職を退任し、新任の明石直之師に席をゆずる。居住は東堂とし、法務や境内の維持管理には新任職を補佐する。

退任式や式典は当面行わず、健在であれば三年後（令和五年）ごろに実施する。電話やファックスは従来通りとし、東堂には新電話を入れる。

おおむね以上です。檀家さんに改めて、ご挨拶状をお送りしますが、ようやく六二年間つとめた住職業から足を洗える安堵さ

と、なにか一抹の寂しさで、いまは複雑な心境です。もちろんお盆の棚経とおせがきは、昨年どおりおつとめしますので、どうかご安心下さい。



参禅会関係は継続

御老師が住職を退かれることは、既に明石師が入堂した時から、既定路線でした。この間、『龍泉院だより』では何回か書かれています。参禅会員もみな承知していました。しかし、「一二月ごろ」と時期を明示されたのは今回が初めてです。

「一二月ごろ」としたのは、交代は曹洞宗

の宗務庁に届け、その許可を得ることが必要です。しかし、コロナ禍で宗務庁の人員が五分の一に減った一方、寺院の相続など仕事が増えたことから、確実に一月中旬に許可が下りるかは分からないためです。ただ、「一月中旬には大丈夫だろう」と言われています。退任後は、明石師と俱に教区の寺院を回り、挨拶をして、参拝をなさるそうです。

御老師は既にその日に備え、居住される東堂と什物を納める宝蔵を建築され、そちらに各種什物を移しており、参禅会員も協力していました。八月には重い本棚を東堂に運び込んでいます。

もつとも、御老師は法務や龍泉院境内の維持管理は明石師に任せても、「今後も参禅会関係は続けたい」と言われています。参禅会とのかわりは、むしろ深くなることも考えられます。

御老師は数年前、带状疱疹にかかって苦しまれましたが、現在はお元気。「最近、健康診断を受けたが悪いところはなかった」とのこと、意気軒高です。

今後も、いつまでも、ご指導して頂けるようです。ますますのご清栄をみんなでお祈りしましょう。

花祭り

麗やかな四月八日、花祭り（降誕会）が行われました。折しも、新型コロナウイルス流行により、緊急事態宣言が出されたばかりでしたが、風通しのよい本堂で、人数を絞っての開催となりました。

昨年九月の台風で被害を受けた門前の杉の巨木一本が「倒壊の恐れがある」として、涅槃会前に伐採され、門前の景色は昨年と様変わりになりました。しかし、一步、山内に入ると、落ち葉一枚、雑草一本もなく、凜として、清々しい空気が漂っていました。

午後二時、定刻通りに花祭りが始まりました。御老師、先導・堂行・副堂を明石師、殿鐘・維那を小畑代表、侍者を松井、侍香を五十嵐の各氏が担当されました。その他参列者は参禅会員山桐、石澤、坂牧の三名でした。

いつもの通り、形の整った儀式が肅々と執り行われ、般若心経唱和の時には、御老師、明石師、小畑代表の声がハッキリ聴き分けられ、感動的でした。通常、式後には坐禅を一炷行いますが、今回は行いませんでした。

式で、御老師は「世界に蔓延している感染症の中にあつて一炷の禅定を見送り、世界と

民衆の平安を祈ります」と述べられました。

式後のご挨拶では、次のように語られました。「コロナウイルスで世情が騒がしい中、参加頂き、降誕会ができ、感謝しています。私たちは亡くなってから誕生日を祝われることはありませんが、お釈迦様はこうして祝われております。生花と宗教は深い縁があります。イラク北方の洞窟から、まだ原人だった遺体が九体見つかった折、花の痕跡も見つかりました。葬った時に花を供えたと推察されます。花により癒される。人生を豊かにしてくれる。沢山の恩恵を受けています。宗教における一番の目的は心の安らぎにあります」



花祭りを祝う



甘酒をお釈迦様に捧げる坂牧さん

式後、花御堂のお釈迦様に甘茶をかけ、大黒様（住職婦人）の体調も回復されたようで、大黒様心づくしの濃い目の甘茶を御馳走になりました。

短い談話の後、甘茶飴と和菓子のお土産を頂き、筍掘りを楽しみ、散会になりました。龍泉院は牡丹が咲き、竹林では薄水色のスミレの群生、十二単衣やぜんまいの「の」の字がかわいらしい様でした。

涅槃の時は満月（望月）だったとされていますが、今年誕生日の四月八日も夜はスーパームーンが輝いていました。

筍掘り

例年四月、参禅会員は例会後の筍掘りを楽しみにしている。だが、今年はコロナウイルス感染症が収まらず、緊急事態宣言に加えて、ステイホーム習慣が始まった。

「風吹けど動ぜず天辺の月

雪庄せどもくだけず谷底の松」

門前の告諭の言葉は、御老師の今のお心と拝察しながら上山。坐禅を組んだのは、御老師、明石師、参禅会員六名。内単に六名、外単に二名が坐り、密ならぬ疎^スだった。

毎年行われていた坐禅作法のお話はなく、高窓が開けられ、風通しの良い雲堂で、定刻通り坐禅が始まった。

二柱目が始まって間もなく、土台が外れるかと思われる程の揺れが二度！ 思わず横を向く…。でも隣に人はいない！ 御老師や他の方の様子がわからない。

うろたえている人の気配も感じられず、そのまま壁と対峙し、坐禅を続けた。静寂が続く中、竹林を抜けていく風の音だけが聞こえた。

終了後、地震の話もなく、提唱後、恒例の筍掘りに。作務班によって整備された竹林の

中で少し頭を出した筍。おいしそうな姿の筍を掘った。

自宅で作った筍ご飯は絶品だった。一年後の筍掘りが楽しみになった。

曹洞禅ナビで当寺掲載

曹洞宗には、寺院のポータルサイトである「曹洞禅ナビ」がありますが、その中に龍泉院の詳細情報が掲載されました。

サイト内で「都道府県」は千葉県を選択し、「坐禅」のチェックボックスにチェックを入れて検索するだけで、簡単に見つかります。

二〇二〇年九月現在では、新しい順に表示すると検索結果の先頭に表示されています。

紹介ページに入ってみると、自然に囲まれた本堂や雲堂など、三枚の遠近感のある写真が目にとまります。もちろん、参禅会員の坐っている姿も見られます。

また、各寺院のページにはそれぞれの特徴を言い表した見出しが付けられている場合があります。今後、参拝する場面の参考になります。当山の見出しは「雲堂が佇む鎌倉時代草創の古刹」。味わい深い、よい見出しだと感じました。

「ギャラリー」の項目が、まだ手をつけられていない状態ですので、四季それぞれの美しい花々や、無心に作務をされている方々の写真などを載せてみると、さらに充実したページになるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、このサイトをきっかけに、龍泉院参禅会への興味を持つてくださる方が増えるかもしれません。それを期待しています。



サイト内に掲載された本堂の写真

参禅会五〇周年に向けて

柏市 五十嵐 嗣郎

今年に入り、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、二月から坐禅普及委員会の活動は自粛せざるを得ませんでした。

来年在龍泉院参禅会発足五〇周年を迎えるので、本来ならば周年企画を検討する時期ですが、まだ緒についていないのが現状です。

四五周年の時、「周年事業は今回が最後かもしれない」という想いで、講演会をはじめ多くの行事や記念出版事業などが行われました。

しかし、その後、あつという間に時間が過ぎ、「五〇周年をどうするか」という課題が現実的問題となってきました。

そのような中で、一部の委員からは、「洞山良价禅師をキーコンセプトにして、周年事業を組み立てては如何か」との意見が出されています。

曹洞宗の開山である洞山良价禅師は昨年、没後一一五〇年を迎えました。臨濟宗の開山である臨濟義玄の没後一一五〇年の際は、臨濟宗は各派を挙げて盛んに行事を行い、臨濟宗の結集した力を世間に鼓舞したものです。

しかし、残念ながら曹洞宗では、洞山さんについて何の行事も行われませんでした。曹洞宗門下の一人として大変寂しいことです。

そこで『洞山』の著者でもあり、日本一洞山良价禅師について詳しい椎名老師に、洞山良价禅師を讃える法要や講演を行ってもらっては如何かというのが、意見の趣旨です。

洞山さんを讃える法要や講演会のほかに、洞山さんを核に色々と周年企画を考えることができるのではないかと、ご賛同される方もいらっしゃると思いますので、検討材料の一つかと思えます。

個人的には五〇周年の節目として、これまでの半世紀にわたる参禅会の活動を体系化した『龍泉院参禅会五〇周年誌』を作成することも、意義のあることかと思えます。御老師や小畑代表のご健全な今だからこそ、成就できるのではないのでしょうか。

いずれにせよ、新型コロナウイルスの感染拡大の収束が見え始めたときから、五〇周年事業の具体的な検討を開始したいと思っております。

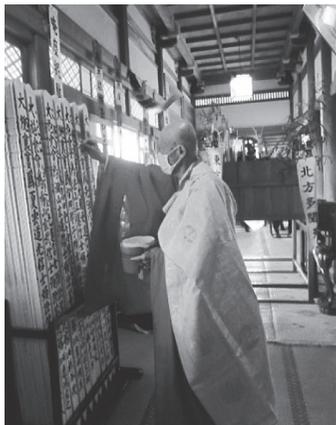
皆様方からも五〇周年に関するご意見やアイデアを、坐禅普及委員会にお寄せくださるようお願い申し上げます。

施食会

八月一六日、施食会が行われました。コロナで多くの活動が中止されましたが、施食会は龍泉院最大の年間行事とあって、規模を大幅に縮小して開催されました。

「新盆の参加者は各家一人」に限定。例年一〇人以上参加される教区の寺の住職も今年は龍泉院の末寺の長栄寺様一人でした。外部の方の法話もなく、時間も午後二時から約四〇分。檀信徒の名前も今回は読み上げませんでした。

参禅会員は一〇人がお手伝い。会場設営や駐車場の整理など、極暑の中、尊い汗を流しました。三密を避けた異例の施食会でした。



没後百年顕彰、「弁栄展」

取手市 近江 札子

令和二年五月二七日から九月三〇日迄、柏市郷土資料展示室において、標記の展覧会が開かれた（写真参照）。今年は「大正の法然上人（浄土宗の開祖）」と評される山崎弁栄上人の没後百年を迎え、当初二月から六月迄の開催予定だったが、コロナのため延期となった。

一 弁栄上人

弁栄上人は柏市鷲野谷の農家山崎嘉平と妻なをの長男として、安政六年（一八五九年）に生まれた。父は「念仏嘉平」と呼ばれ、信仰篤く、弁栄上人も幼少期から鷲野谷の善龍寺や医王寺などで仏教や漢籍を学び、出家した。

芸術的な才能も発揮し、書画や米粒に書いた六字名号「南無阿弥陀仏」により、人々の縁を広めた。

自作の手風琴（アコーディオン）やオルガンを弾きながら、子どもたちに楽しく分りやすく教えを広め、全国的に支持を拡大した。さらに、インド・セイロンの仏蹟参拝、満州・朝鮮へも広がる伝道をし、光明学園（神奈川

県の光明学園相模原高等学校）を創立した。そして、今から百年前の大正九年（一九二〇年）一二月四日、六二歳で新潟県柏崎市の極楽寺で遷化した。

二 柏が生んだ聖「弁栄展」

上人の法衣、墨蹟や仏画、手風琴など計六一点が展示された。圧巻は米粒に書いた「南無阿弥陀仏」。全部で数千粒に及ぶという。両手同時に異なる文字を書いた書、インドより持ち帰った土を混ぜて造った釈尊像のレリーフなど、上人の多彩な才能が窺えた。

三 弁栄上人と龍泉院



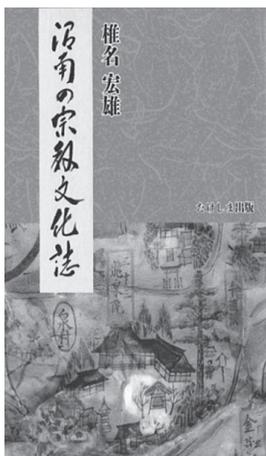
上人の母が泉出身であることから、龍泉院とは縁が深い。当院からの出品は、弁栄作の文殊菩薩図・子安観音図・準四国八十八箇所道案内図と、教卓（説教机）の四点であった。

『沼南の宗教文化誌』を上梓

御老師が二月に『沼南の宗教文化誌』（発行たけしま出版、価格二四〇〇円プラス税）を上梓されました。

「永年にわたり沼南町や柏市が刊行した各種の史誌料的な文献中に、筆者が書いた郷土史や宗教文化方面の記事を抜粋し、これを再編した読み物で、これに筆者の自坊である龍泉院の寺報に記載してきた同様の記事も若干採録しました」（「はしがき」から抜粋）。

「沼南」と冠したことから、単に龍泉院だけでなく、多くの寺社に触れられています。古刹である龍泉院には什宝が多く、この本の中にも多くが載せられています。沼南が昔から、宗教面でも文化面でもレベルが高かったことが伺えます。



想うこと

新冠病毒 コロナウイルス

松戸市 小幡 節朗

コロナウイルスで、久しぶりに次のような漢詩を作ってみました。

新冠病毒虐全球 コロナウイルス地球を虐

げ

疾疫横行禍未休 疾疫横行して、禍未だ休

まず

世界交通多陥穽 世界こもこも通じれば陥

穽多し

共存俱命抜其尤 共存俱命、其の尤を抜か

ん

【俱命 仏教説話】

昔、雪山に胴体が一つ、首が二つの鳥がいた。一方は美味の果実を食し、安穩に暮らし、一方はその果実を得られず、不満と嫉妬を抱いていた。ついに毒果を与え、片方を死にいたらしめた。一身同体、両方共に死んだ。この鳥、俱命鳥は『阿弥陀経』では極楽に住んでいる。(尤「ゆう、咎めの意、韻の関係でこの字を使用しました)

神社信仰復活論

柏市 杉浦 上太郎

二月から体調を崩しましたが、今、復調段階です。今まで、健康と空気はタダみたいにして、ついぞ節制を心掛けることを全くしてきませんでした。

この度は、自分だけ特別ということがないことを悟りました。さて、「コロナ騒動」の中、困難な事象に宗教が果たす役割ということを考えてさせられます。

宗教は、成果主義で考えると無力なのですが、「精神的依り代」の役割が重要なのだと思います。真心をもって信じることにより、心身の安心(あんじん)を得ることができま



妙正神社

我が家の近所に、妙正神社という小さな社があります。愛称「ほそ様」。江戸時代、疱瘡(天然痘)が大流行し、多くの人がバタバ

タ亡くなったとき、一縷の望みを託して村人が祈った依り代だったとのことです。

一寸した縁で、氏子さんたちの集まりに出る機会があつて、「ほそ様」の愛称の可愛らしさや長年、医薬品を生業としてきた者の好奇心から、民間信仰と病気の関係に興味をもつようになりました。

かつて、この「ほそ様」があることによつて、村人が挙つて祈る場を共有し、地域のアイデンティティが構築され、安心が得られたのではないかと思います。

近隣には多くの小社がありますが、地域から忘れ去られ、埋没状態になっています。かつては大いなる存在があつたに違いないと思うと、実にもったいない気がいたします。

この「ほそ様」は、氏子さんたちが懸命に守っていますが、分祀を受けた先がどこかなど来歴内容が希薄になっているようです。

私はいま、同神社に係る関連資料を集めて、「神社信仰復活論(地域活性化)」の小論文を作成しようと思っています。参禅会の近江礼子さんにも貴重な資料を提供頂きました。

これは町会の役員を長年務めた結果、会員の無関心さに空しさを感じる気持ちの反映でもあります。地域のヘソにならないか、と…。

途切れず行うのが修行

明石 直之師

千葉県柏市に来て龍泉院のお世話になってから、はや一年が経過しようとしています。

その間、お寺の行事に通り携わってきましたが、私がこれまでいた関西とは違う行事や習慣を目の当たりにすると、しばしば戸惑ってしまうことがありました。

しかし、お檀家さんや参禅会の皆様と接することで徐々に慣れていくことができ、皆様には本当に感謝しています。

私は、この地に来るまで、京都は丹後地方宮津市に所在する智源寺と云うお寺で修行していました。修行期間はおおむね四年半で、そこで、いろいろなことを経験させて頂きました。

皆様のイメージとして、修行と云うと、滝に打たれたりとか、険しい山々を踏破したりとか、食事も摂らず不眠不休で苦行をするとかと思われがちですが、こと禅宗の修行はそんなものではありません。一日の行事(行持)は決まっています、それを途切れること無く、ひたすら続けていくと云うのが禅宗の修行です。

一日の流れを簡単に説明すると、朝の坐禅、朝のお勤め、小食(朝ご飯)、作務(仕事)、

昼のお勤め、中食(昼ご飯)、作務、晩のお勤め、薬石(晩ご飯)、夜の坐禅、と云った感じです。時には、その間に法要及び法事並びに典座(食事係)などが入ります。

慣れるまでは覚えることが沢山あって大変ですが、一通り修行生活に慣れて来ると、意外とつらいのが「単調さ」です。その単調な日々に対し、いかに自己を滅し、物事に真剣に取り組もうとするかが、修行にとって、とても大切なことになっていきます。

宗門のお坊さんに大智禪師という方がおられますが、その方に次のような言葉があります。「一日二十四時間途切れること無く決められた勤めを果たすこと、それが禅宗の修行です。一年、二年、一生というのは、この一日が循環し持続していくことなのです」(筆者意識)。

修行生活から離れると、なかなか行持綿密にはいきませんが、もし、日々の生活において俯仰天地に恥じるような行いをしそうなった時、この言葉と修行時代を思い出し、自身を省み、正していこうと思えます。

「天与生動」

松戸市 河本 健治

今年は新年早々から(二カ月間)入院のスタートとなりました。思いもよらぬことに、困難な状態が続き、いろいろな方に心配をかけた。当時を省みて、今、こうして筆をとっていることが不思議でもあり、「健康が第一」と感じているところです。

退院の頃、新型コロナウイルスの言葉を耳にしてから、瞬く間に、昨今の現状となり、言葉を失っております。養生と自粛の身の上であって、「ここは天が与えしこと」と静観するしかない有様です。

先々が不透明な現状において、これとした解答もなく、今回ばかりは無常観、生死観といったことを直接、自身に突き付けられた感じがします。

また、生かされているとの自覚をもって、「今できることをすればよいのではないか」と、禅の教えや、その叡智に何かを探している自分でもあります。

自らの魂に耳を傾け、寄り添いながら、そこから見える風景を楽しめればとの思いで行きます。

坐禅を身近に置いて、呼吸を調べ、静かに坐る「只管打坐」の坐禅を、いつの日か、龍泉院坐禅堂（雲堂）で再び出来る日を楽しみにしております。

合掌



河本さんの版画

坐禅後「ホットするひと時」

白井市 中原 悦雄

参禅会に参加して、一年が経過しました。その間、坐禅、参禅会行事に参加、今年から作務にも参加し、活動しております。もともと、参禅会参加は、「他人に依存せず、自分に向き合いたい」という禅に対する期待が原点です。今、坐禅後の「ホットするひと時」を体験しております。

坐禅には当然、ルールがありますが、坐禅中は自分だけが相手です、終了後はサラッとした安堵感があり、それが「ホットするひと時」です。

これは、邪心なく、無心に取り組んだ結果「ホットする」のだと思います。この「ホットする」は得難い感慨であり、多くの人が坐禅に惹かれる核心の一つと思うに至っています。現在、作務にも参加しています。寒くても暑くても、肉体労働を行うわけですが、作務終了後は、まさしく坐禅と同じ「ホットする」気持ちです。これも、邪心なく、無心で、自分の意志で作務に取り組んだ結果だと、思っています。お寺という公開性の高い場所で行う行為が、これほど自分に「ホットするひと時」を与えるものかと感じ、これも大きな感慨でした。



マスクで作務の中原さん

ビジネスの「ホットするひと時」

私見ですが、ビジネスは人・物・金・情報を集約、構成し、利潤最大化を求めて従業員、株主、取引先、国（公共）に還元するのが、

その核心です。当然ながら、個人は利潤最大化への貢献が責務になります。結果、私の経験ではビジネスの場に「ホットするひと時」はなく、任務のウサは酒席や歓楽に求めています。それは利潤目的の組織の中で、「ホットするひと時」を求めることが、許容されないからです。

しかし、今は参禅を通して、「ビジネスの場でも工夫すれば両立は可能だった」と思うようになりました。自らの意識だと思っています。つまり、ビジネスと並行して坐禅に取り組むべきであったと思ひ、大いに反省しております。

その意味で、若い参禅会員を羨しく思っています。ぜひ、私のように後悔をしないよう、「ビジネスの目的」と「ホットするひと時」を両立されることを、心から願うのであります。

コロナと娘たちとの日々

我孫子市 吉澤 誠

新型コロナウイルス緊急事態宣言で、我が家の一番の影響は、娘たちが通う小学校と幼稚園の休校でした。長女が小学四年生、次女

が幼稚園年長ですが、困ったのが留守番です。長女は戸締りすれば、一人で留守番が可能です。最近はお母さん（特に父親）と一緒に時間を避ける傾向が出てきており、若干、寂しいですが、留守番という点では問題ありません。問題は次女です。一人ではもちろん、長女と一緒に留守番でも不安が募るらしく、私か妻がいないと不可能な状況です。妻も週四日勤務のため、お互い勤務調整をし、対応しました。

次の問題は娘たちの運動不足です。

私と妻は仕事で、それなりに体を動かしますが、子供たちは家でゴロゴロ籠りつきりです。これも解消せねばと思います、我孫子市HPに掲載されている市内の散策コースを調べ、子供を連れて歩くことにしました。

我孫子市西部の船戸に一五年以上住んでいますが、東部の新木や布佐は、行く機会がありませんでした。

散策コースは寺社をめぐる内容も多く、将門神社や日秀観音、竹内神社などを初めて訪れ、市内を知るよい機会となりました。学校も通常授業に復帰しましたが、まだまだ心配はつきません。

早くコロナの収束を願うばかりです。

『正法眼蔵恁麼』を写し終えて

流山市 久光 守之

庭の紫陽花が咲き誇り、「汝なんぞ恁麼事を愁えん」と語りかける中、『恁麼の巻』の三回目の写経を写し終える。

尽十方世界が無上菩提であり、余物なし、「直趣無上菩提、しばらくこれを恁麼といふ」と高祖様は説いておられる。

現在、新型コロナウイルスが流行して、外出を控えさせられるなか、これが恁麼と考え、坐禅、そして般若心経、観音経の写経と忙しい一日一日を過ごさせて頂く。

仏縁により、参禅会に入会させて頂き、御老師より講話して頂いた『正法眼蔵』の写経が、私の一日一日、第一の修行となりました。お陰様で朝のウォーキングで会った、すべの樹林、紫陽花、グラジオラス、人ひとりが、なにもものも、「是廢物恁麼来」と合掌させて頂く日々です。

私も高齢になり、生死と直面することが多くなり、「生死即ち涅槃と心得て、生死として厭ふべきもなく、涅槃として欣ぶべきもなく」(「修証義」第一章総序)を痛感させて頂いています。

この梅雨の中、雨が降るのも実相、雨が死ぬのも実相。生死を身心に任せ、生死を道に任せ、生死は生死に任せんと、礼拝する日々です。 合掌

晴れないWITHコロナ

柏市 霜崎 美穂

コロナ禍にあり、私は感染症拡大の中心である二〇代、参禅会の皆様にはご高齢の方が多く、しばらくは参禅の自粛を続けたいと考えています。

未知のウイルスと向き合うには、「自分の頭で考えることが大事だ」と、思い知らされます。

無闇に恐れるのではなく、「コロナはただの風邪」と、たかをくくるのでもなく、どうしたらウイルスとともに生きていけるのかを考えています。

コロナ禍に加えてもう一つの憂鬱が、この七月、ほとんど晴れ間がなかったことです。庭で育てているトマトも全然育ちません。太陽光、自然、人とのコミュニケーション…。無意識のうちに様々なものに支えられていたのだと、痛感するこの数カ月でした。

奉仕作務を初めて一一年

柏市 松井 隆

一 初心の思いと継続の力

平成二十一年に始めた龍泉院参禅会による庭の手入れも、今ではなんと一〇名位の方々の手伝って頂き、月三回の定例作務を実施し、早いもので一一年になります。椎名老師が長年、育て上げてこられた庭の様子を、できるだけ保持したいと、作務チーム一丸となって、「継続は力」と思い、頑張っています。

この投稿は編集委員の市川君から依頼を受けたもので、二年前の六九号の続きとして、作務チームの状況を纏めました。

「初心の発心」については、御老師の御提唱の中でお示しを頂戴し、チームの皆さんは多分、「坐禅道場や庭を綺麗にしたい！」との発心で、参加頂いていると思います。

また、次期和尚候補の明石師もみえて、さらに寺院が綺麗になってきました。このことは椎名老師と明石師の坐禅指導とともに、作務チームの強い支えになっていくと思います。

二 作務チームの作業内容

作務チームの仕事の中身は、大きく次の三点に分けられます。

(一) 本堂前と坐禅堂やお墓周辺の剪定

(二) 竹林を含めた広い裏山の手入れ

(三) 坐禅堂・お墓の水場やトイレの掃除

樹木の剪定は、高さによって、高木、中木、低木に分けられています。当チームでは低木の剪定を主に行っています。

三 樹木の剪定作業

龍泉院の庭では低木の本数が圧倒的に多く、樹種も多岐に亘って、躑躅、皐月、玉栢、山茶花、沙羅、松、梅、椿など花を付けるものも多く、庭全体が整えられています。



マスクで作務の松井さん

剪定は季節に応じて作業を行っています。この剪定が、なかなか大変なのです。チームの腕の見せ所でもあります。椎名老師の手厚いご指導があつて、進めてこられたと思います。

季節ごとの剪定は、春には参道から本堂、

庫裡、お墓に掛けて躑躅の花後の刈込で、玉栢植、躑躅などの玉仕上げです。夏も近づくと「八十八夜」には、五葉松の新芽かきです。そして、夏に咲き誇った紫陽花の剪定は、秋一杯かけて行います。

四 竹林と広い裏山の手入れ

作務チームでは、竹林を含めた広い裏山の手入れも、重要な仕事です。作務チームの山の手入れによって、素晴らしい竹林が整備されました。

最近では、ウラシマソウ、ホウチャクソウ、キンラン、ヤマユリなど多くの草花が咲き誇り、真に見応えがあります。

ここまで続けられたのは、やはり椎名老師の、参禅会への思いや姿勢にあると思います。

五 清々しいサンガの誕生

檀家の方には「ご苦労様」と、声かけて頂きます。また、参拝の方々は「この寺は綺麗だな！」と、感心して帰られます。

作務は半日の短時間ですが、お茶タイムには、御老師を囲んで団欒が弾みます。大黒様が浸けられた梅ジュースが真夏の甘露です。

このグッドな奉仕作務チーム(サンガ)の継続と参禅会皆さんのご健康を祈念して、最近の作務チームの報告といたします。合掌

本来性と現実態（一）

柏市 五十嵐 嗣郎

一昨年までであった一夜接心では、『普勸坐禅儀』を全員でお唱えしましたが、『普勸坐禅儀』の冒頭には、「原ぬるに夫れ道本円通、争か修証を仮らん」とあります。

その意味するところは、たずねたずねて、その道本をきわめつくした結果、本当の道というものは、本来、完全円満に通じているもので、だれもみな完全無欠の存在であり、自由自在に生活することができる。

初めからみな完全な人で自由な人であるから、どうして修行をして、それからさとりを開き、その力をかりて、完全な人になったり、自由な人になったりする必要があるか。「そのようなことは必要ない」という、お示しです。

坐禅を否定せず

これまで一夜接心などで『普勸坐禅儀』をお唱えしている時は、その意味するところはあまり考えていませんでした。しかし、改めて考えてみると、修証とか功夫とか坐禅とか、そのようなものは一切必要としないということですから、これでは冒頭から坐禅を否定し

ていることになりました。

でも、そのようなバカなことがある筈がありません。ここは一度立ち止まって考えてみたいと思います。

現実の坐禅をみる

さらに『普勸坐禅儀』を読み解いてゆくと、「然れども、毫釐も差あれば、天地懸に隔り、違順纒に起れば、紛然として心を失す」と続きます。

そうではあるが、我々の実生活の中で、世界に対する基本的な見方がほんのわずかも食い違っていると、それは生き方において天と地ほどの違いが生じて、何が何だかわけが分からなくなつて、本心を見失い、仏道にそむいてしまうことになる、仏道に対するスタンスの僅かな違いに注意することを喚起しているところです。

続けて、「直饒い、会に誇り、悟に豊かにして、警地の智通を獲、道を得、心を明めて、衝天の志気を挙げ、入頭の辺量に逍遙すと雖も、幾んど出身の活路を虧闕す」とあります。仮に、非常に頭がよく、様々なものを理解する力が優れており、様々な問題について正しい判断ができ、そのような智慧がほんのわずか行きわたっていると、大悟徹底したと、

天を突き抜くような心意気になってしまふ。でもそれはつまるところ、さとりの世界のほんの入口あたりをウロウロして、いい気分になって楽しんでいるだけであると、道元禪師は示されています。

本来の坐禅と現実の坐禅のギャップ

『普勸坐禅儀』の冒頭では、「本来ならば、道本円通なので、誰もが完全無欠の存在であり、自由自在な生活をしているので、修行とか証などは必要としない」と述べられています。

しかし、次の段になると、現実の我々個人の生活においては、世界に対する見方が食い違うことによつて生き方に混乱を来し、どうしたらよいのかわからなくなつたり、あるいは、逆に仏法を学んでさとりことができ、ちらつと智慧を得ると、大悟徹底したと自信満々鼻息が荒くなると述べられている。

即ち、初めに、人間は本来完全無欠で自由自在な存在であるとする本来性が示されているのに対して、次の段では実際の人間は生きがいわからなくなつて悩んだり、反対に大悟徹底したと自信過剰になつたりしている現実態が示されているのです。

小さきは 小さきままに

我孫子市 清水 秀男

新型コロナ禍による巣ごもりに近い生活が続いていますが、ウイルスと闘うためには、フレイル（虚弱）の進行を抑え、自然免疫力を高める習慣をつける必要があると言われています。

私は、免疫力を高めるために早寝早起きし、血液とリンパ液の流れをよくするべく、朝と昼のラジオ体操、早朝の散歩、坐禅を行い、夜はぬるめの湯に浸かり、体を温めることなどに留意しています。最近、コロナ禍で感じていることを二つ述べます。

散歩で学ぶ

第一は、散歩における学びです。散歩には、思わぬ貴重な発見と学びがあります。それは、普段見過ごしてしまっている道端や石垣や溝の隙間に、ひっそりと名も知れず何の作意もなく咲いている小さな野花に出会えることです。

それは、与えられた所で、けなげに不平一つ言わず、きらびやかに咲く花と同じ重みの「いのち」を精一杯発現している神々しくも、美しく安らかな姿だと思えてなりません。

その姿は日本社会学及び経済学の父と言われる、歌人としても有名であった高田保馬博士

（一八八三～一九七二年）の名歌、「小さきは 小さきままに 花咲きぬ 野辺の小草の 安けきを見よ」、そのものです。

名もない野花は、ボタンの花になることは出来ない。しかし、それは何ものにも代えることのできない唯一の存在であり、存在しているなりに全力をもって堂々と咲いている。そして、それは大自然の「いのち」の花が咲いているのだと、その尊厳さに合掌せざるを得ません。

『華嚴経』の中に「一々の微塵の中に一切の法界を見る」、即ち、それぞれの微小なるものの中に、無限なる全宇宙が宿っているという言葉があります。

私自身を例にとると、名もないちっぽけなる存在なるも、それは唯一無比であり、全宇宙とぶつづきの関わりの中において存在しているということでしょうか。

自然のままに咲く野辺の小草の「安けき」生き方は、背伸びすることなく、自分中心の思いを捨て、等身大で精一杯「いのち」を輝かせて自然（ジネン）に生きることの大切さを教えてくれています。

「小さきは 小さきままに 清水秀男は 清水秀男のままに」と。

キーポイントは退歩

第二は、道元禪師の『普勸坐禅儀』の一節、「回光返照の退歩を学すべし」を身に沁みて感じていることです。

回光返照とは日頃、外に向かって振り回されている心の働きを、自己の内側に転じて反省すること、退歩とは根本、即ち本来の処に立ち帰ることだと理解しています。

この中で退歩がキーポイントであり、退歩とは進歩に対応する後退を意味するのではなく、一歩立ち止まり、じっくり自己及び世界を見つめ直し、生きる原点に立ち戻ることだと思えます。

そして、私に一番欠落しているのは退歩の思想であり実践だと、コロナ禍の巣ごもりの中で、あらためて気づく機会を得ました。

そして、同時に、退歩を踏まえた上で、「Never Waste a Good Crisis」（いのちの危機を無駄にするな）の精神で、コロナ禍を逆にチャンスと捉え、その中でしか出来ないことに挑戦し、ポジティブに生きていかねばと思っているところなのです。

義兄の死に想う

柏市 岡本 匡房

緊急事態宣言の真つただ中の四月一五日、東京に住んでいた義兄が逝った。九三歳。死因は肺炎だった。一三日に発症、わずか二日間での出来事だった。

「コロナウイルスによる肺炎」との見方から、家族は誰も亡くなる時に面会できなかった。幸い、陽性ではなかったので、葬式は行うことが出来たが、「家族だけで行う」とのこと、親戚はだれも参加できなかった。

コロナウイルスが猛威を振るっている。心の病にかかる人も多く、DV（家庭内暴力）の話も多い。ところが、それについて話すテレビ番組では宗教者はほとんど出てこない。「体の病」を治すのが医者なら「心の病」を治すのが宗教ではないだろうか。それが全く聞こえてこない。

小生は三〇年近く坐禅をしている。七八歳＋糖尿病という身にとつて、コロナウイルスは他人事ではない。だが、残念ながら、坐禅では心の平安は得られない。

幸い、家庭菜園を行っているので、畑に行くと雑念が少なくなる。作務をしている時も、

心は平穏になる。この境地をどうしたら、普段の生活に持ち込めるのだろうか。

小生の好きな言葉に『正法眼蔵生死の巻』にある。それは次のような言葉だ。

「わが身をも心をもはなちわすれて、仏のいえになげいれて、仏のかたよりおこなわれて、これにしたがいもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをもついやさずして、生死をはなれ、仏となる。たれの人か、こころにとどこほるべき」

一見、「自力」といわれる曹洞宗だが、この言葉は「他力本願」を説く、浄土真宗のように見える。だが、これもまた、道元禅師の教えに違いない。

NHKの「このころの時代」を見ていたら、こんな言葉が出てきた。

「空は空、空は空、一切は空である」

一見、禅の高僧の言葉のようだが、これは『旧約聖書のコレヒトの言葉』だそうである。宗教は富士山のようなもの、登る道は違っても、頂上は同じかもしれない。

コロナは人間の生死を虚飾を解き放つて、眼前に突き付けてきた。「一日、一日、精一杯生きよう」と想っても、なかなか、心が定まらない。宗教はどう応えるか。

徳山浩さんを偲ぶ

松戸市 小畑 節朗

古参の徳山さんが、享年九三の天寿を全うされ、去る七月二六日逝去されました。生前を偲び、ご冥福をお祈りいたします。

想えば、三七年に渉る弁道精進でありました。長身で端正な坐相は、今も眼に浮かびます。

控え目でいつも和顔愛語、一級建築士で公団、上場会社の役員であったことなど、おくびにも出さず、自己を律することに厳しくありました。

時の流れの中で、語り尽くし難い思い出を残し、道友がまた一人旅立ちました。会者定離は必然。とは言え、心に大きな隙間のあいた寂しい令和二年の夏であります。 合掌



沼南雜記

●二月二三日 二八名

(門脇 弘氏)

●三月二三日 一〇名

(司会者なし)

●四月 八日 六名

―降誕会―

●四月二六日 五名

(司会者なし)

●五月二四日 九名

(司会者なし)

●六月二八日 二二名

(五十嵐 嗣郎氏)

●七月二六日 二三名

(近江 礼子氏)

〔編集後記〕

▼辞書で調べた単語のページに付箋を貼っています。たくさん貼るので、一個一個の意味をはっきり覚えられていません。ですが、自分がどういう事柄に興味、関心があるのかは少しずつ分かっています。

▼コロナ自粛により、楽しい日常が九割以上停止。これまでの日常生活に感謝、コロナ終息を強く願うのみです。(近江)

▼コロナ騒動で、高齢者の方々の参禅がぐんと減っています。無理もないとは思いますが、いつ、小生もそうなるかも。参禅会の風景も今後、大きく変わる気がします。(岡本)

▼会友河本健治さんは、年初来四大不調の為、参禅会をお休み中。今号に一文(「天与生動」)を寄せて頂いた。あわせて「蓮」の版画も掲載されている。原画の色鮮やかさを紹介できぬのは残念。祈早期快復。(佐藤)

▼丁寧な作務のお蔭で、今年も山百合を写真に納め、葉書に仕立てました。コロナウイルスのない清々しい空気感も一緒に暑中見舞しました。(坂牧)

龍泉院参禅会簡介

【参禅】

一、定例参禅会

・日時 毎月第四日曜九時(初参加者は八時半) 来山、正午解散
・坐禅 口宣、坐禅、経行、坐禅の順

(坐禅は一炷三〇分、経行は一〇分)

・提唱 木版三通、開経偈、『正法眼蔵』の提唱

・座談 自己紹介・喫茶・座談

一、自由参禅

・日時 毎月第一日曜と第二土曜日

・坐禅 九時から一〇時半時まで(入堂九時まで、退堂自由)

※会費無料、年齢・性別など一切不問、初心者には懇切に指導

【年間行事】

一、一日接心 本年は六月二日、四炷の坐禅と提唱等

一、成道会 本年は二月八日、坐禅二炷・法要・問答・法話等

一、他の行事 涅槃会(二月一日)、花祭り(四月八日)、施食会(八月二六日)、歳末助け合い鉢鉢(一二月)、団体参禅受け入れ、歳末煉払い(一二月例会後)

一、作務 毎月第一と第三金曜、及び第二土曜に境内の掃除等

【会報誌】

一、『明珠』(四月八日と一〇月五日発行)

一、『口宣』(年一回)

【ウェブサイト <http://www.nyusenin.org/>】『明珠』『口宣』

のバックナンバーをご覧になれます

【自由参禅】

二月 二日(九名)、八日(二六名)

三月 一日(二名)、二四日(六名)

四月 コロナで休会

五月 コロナで休会

六月 七日(二〇名)、三日(九名)

七月 五日(八名)、二日(二名)

八月 二日(九名)、八日(二名)

【奉仕作務】

二月 七日、二二日

三月 六日、二〇日

四月 三日、一七日

五月 一日、一五日

六月 五日、一九日

七月 三日、一七日

【坐禅普及委員会】

令和二年二月から七月まで新型コロナウイルスの影響で開催せず。

コロナウイルスの影響で開催せず。

●発行/天徳山龍泉院 千葉県柏市泉 81
●印刷/東港出版印刷株式会社 渋谷区渋谷 2-7-7
☎04(7191)1609
☎03(6803)8470